毛利 悠子

For the Birds

2021 / スピーカー、マイク、コンピューター、音声認識ソフト、LEDディスプレイ、鳥の餌、ほか

© MOHRI Yuko

CURATOR’S NOTE

本作では、日本国内のとある遠隔地の森の風景がライブストリーミングで配信されている。現地では、スピーカーから流れるコロナ禍に関連する文言が偶然聞こえる周囲の音と交じり合い、マイクで収音される。これは音声自動認識プログラムにより奇妙な言葉に変換され、この音声出力→収音→誤変換という過程が繰り返されフレーズは変わっていく。言葉の誤変換を表現することはサイバースペースの中だけでも可能だが、毛利は意図的に現実世界を介入させる。今日私たちが体験しているリアルとバーチャルの混乱が、言葉の混乱に重ねあわされているかのようである。

本作はジョン・ケージとダニエル・シャルルの対談集『小鳥たちのために』（1982年、青土社）に想を得たもの。ケージの苗字「Cage」は「籠」をも意味するが、移動を制限された今日の私たちも籠の中の小鳥と同様であろう。その中に閉じ込められた私たちはネット上で（時に作為的に）事実と異なる内容にズラされ変化していく無数の言葉を読むという、コロナ禍の日常を作家は念頭に置いている。現地には鳥の餌付けも置かれるが、現在、「鳥のように自由」（free as birds）という言葉以上に私たちよりも自由な鳥たちは、本当にこの誤変換のループに加わってくれるのだろうか？（K.K.）

＊作品で使われている変換前のフレーズ

Social Distancing
To adapt to the new normal
State of emergency
Keep distance
Wear a Mask
Wash your hands
Cover your mouth and nose
Thank you for your understanding and cooperation
Self-quarantine
Stay home
Refrain from going out unless necessary
Work from home

Join by Video
Some people are already infected by COVID-19
Pandemic-level increase in patients
Please practice proper hand washing and gargle with mouthwash whenever possible
Do you have symptoms such as a fever or cough?
Preventing the spread of infection
Keep rooms reasonably humid and ventilated
Enough rest
I will get vaccinated next week
Social Distance
For the Birds

CREDITS

プログラミング
濱哲史

ストリーミング
田中信至

協力
吉住公一郎

PROFILE

© Kenshu Shintsubo

PROFILE

© Kenshu Shintsubo

毛利 悠子（もうり・ゆうこ）

1980年神奈川県生まれ。現在、東京都在住。日用品や玩具、楽器、機械の部品、水や光など多様な物を組み合わせ、立体作品やインスタレーションを制作する。作品の各構成要素の動きや反応は連鎖し、意外性に富んでおり、また、磁力や重力、気流といった目に見えない力を可視化する。マルセル・デュシャンやウラジーミル・タトリンなど近代芸術を参照する作品もいくつかある。また、物の動きを音に変換したり、音の遅延やズレ、反響などを利用したりするなど、サウンドが核となる作品も多い。
主な展覧会に、個展「ただし抵抗はあるものとする」（十和田市現代美術館、青森、2018）、個展「ヴォルータ」（カムデン・アーツ・センター、ロンドン、2018）、「第9回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」（ブリスベン、2018年）、「ジャパノラマ：1970年以降の美術の新しいビジョン」（ポンピドゥー・センター・メス、メス、2017）、「ヨコハマトリエンナーレ2014」（神奈川、2014）、など。

Website

← →

野口 里佳

光る海

2021、ビデオ（サイレント）（18分）

© Noguchi Rika

CURATOR’S NOTE

水平線が強調された構図において、人や船が遠巻きに見える。全32のシーンは、沖縄のとある場所の波打ち際の様子を繋げたものだ。映像に少しでも集中すれば、少しおかしなことにすぐに気づくだろう。さざ波が少し早いこと、あるいは反対に、ぬかるみに足を取られているにしては、浅瀬を歩く人々の足取りが重たすぎることに。倍速やスローモーションが、ショット内の小さな対象に控え目な異化効果を生み出し、わたしたちの注意をそれら小さな対象へと向かわせる。わたしたちの目はそれら小さな事物に徐々に慣れていき、もっと些細でふしぎな出来事──釣竿に反射する光、画面を横切る鳥、不意に踵を返す船やヨット、浅瀬を歩きながら語らう二人、水面から不意に頭を出す人、雲の動きと地上の人の動きの対比など──を見つけ始めるだろう。

ドラマのきざしがそこにある。このあと、人は、船は、あるいは雲はどこに行くのか、そんな疑問が湧き上がるのも束の間、画面はフェードアウトし、次のショットへと切り替わる。もしもその小さな物語の行く末を知っているものがあるとすれば、画面に登場し続ける、これら小さな出来事の舞台である水平線だけだ。こんなふうにわたしたちの注意は細部を経て、水平線へと至り、やがて想像力は映像のフレームを超えていくだろう。なぜならば、水平線は画面内の構図を規定すると同時に、そのフレームを横切り、こちらとあちらを分けることで、もっと遠くの世界があることをも示唆するからだ。（M.T.）

CREDITS

謝辞

島袋銀河

Courtesy of the Artist and Taka Ishii Gallery

PROFILE

撮影：島袋銀河

PROFILE

撮影：島袋銀河

野口 里佳（のぐち・りか）

1971年、埼玉県生まれ。沖縄県を拠点に制作活動を行っている。「見えないけれどそこにあるもの」を可視化する手段として、野口は写真というメディアを用いてきた。彼女の鋭い感性はモチーフ選択や視点の特異性に看取できるが、もっとも特筆すべき点は、対象を包み込むかのような柔らかな光の捉え方にある。近年は、昆虫や植物などに焦点を当てた映像作品の制作にも取り組んでいる。
近年の主な個展に、「海底」（タカ・イシイギャラリー、東京、2017）、「To the Night Planet」（ロック・ギャラリー、ベルリン、2016）、「光は未来に届く」（IZU PHOTO MUSEUM、静岡、2011–12）グループ展に、「瞬く皮膚、死から発光する生」（足利市立美術館、栃木、2020）、「ふたつのまどか」（DIC川村記念美術館、千葉、2020）、「Reborn-Art Festival 2019」（宮城、2019）、第21回シドニー・ビエンナーレ「SUPERPOSITION: Art of Equilibrium and Engagement」（シドニー、オーストラリア、2018）など。

Website